

令和四年度 一般入学試験 (B日程) 国語

徳山看護専門学校

| |
|------|
| 受験番号 |
| 氏名 |
| 得点 |

※ 解答はすべて解答欄に記入してください。

問題一 次の文章を読んで問いに答えてください。

メロスに出会ったのは、私が中学生の時だっただろうか。メロスとは、あの名作「走れメロス」の主人公だ。小説の舞台は、神々の王ゼウスが登場するから、多分、エーゲ海を歴史と①で彩り、ヨーロッパ文明のさきがけとなった古代ギリシャだ、と思っている。戦いの多い時代だった。人々は敵に不断に備え、町を塙で囲んだ。都市国家だ。王の絶対条件は戦いに勝てること。負ければ民も富も一切を敵は奪い去る。正義は勝者にあった。負ける王が悪い。王の日常に②は禁物であった。

そのためもあるのか、町の中心には王城とは別に神殿があった。王も人々も神を身近に仰いで生きていた。作者は書いていなくても、このような背景を把握しておけば小説を読み誤ることは少ないし、面白さは格段に増す。さて、「走れメロス」。作者は次のように書き出して、短編だけに一気に読者を小説の舞台に引き寄せる。

メロスは激怒した。必ず、かの邪智暴虐^{じやちぼうぎやく}の王を除かねばならぬと決意した。メロスには政治はわからぬ。メロスは、村の牧人である。笛を吹き、羊と遊んで暮らしてきた。けれども邪悪^{じあく}に対しては、人一倍に敏感であった。③「邪智暴虐」悪知恵でむごく苦しめること

きょう未明メロスは村を出発し、シラクスの町に買い物にやって来た。二人きりで暮らす十六になる内気な妹が結婚する。せめてきれいな衣装を着せてやりたい。もう一つ、この町には竹馬の④、無二の親友セリヌンティウスがいる。二年ぶりだ。会うのが楽しみだ。ところが、町が怪しい。「どうしたんだ、これは。前は夜でもみなが歌を歌っていたではないか。」「王様は、人を殺します。」老人が辺りをはばかりる小声でわずか答えた。「なぜ、殺す。王は狂うたか。」「人が信じられなくなったというのです。毎日殺されます。王様の妹様もそのご主人も。忠臣までも。」聞いてメロスは激怒した。「あきれた王だ。生かしておけぬ。」

メロスは単純な男だった。のそのそ王城へ入っていき、たちまち捕まった。「その短剣でどうするつもりだったのだ」王ディオニス^{ディオニス}は静かに、だが威厳を込めて聞く。「町を暴君から救うのだ。」「おまえが、か？ お前などには王の苦しみは分からぬ。」「言うな。人を信じられぬ王に明日はない。」「磔^{はりつけ}台の上でもそう言うがよい。」「私は命乞い^{いのこい}などしない。ただ・・・死刑は、三日だけ待つてほしい。村に用がある。」「

「ばかな、逃げた小鳥が帰って来るといふのか。」「そうです。⑤来るのです。信用できないのなら、私の親友セリヌンティウスを身代わりに置いていく。三日後の日没までに私が帰らなければ、彼を殺せ。」「よしよし。そしてお前は、少しだけ約束の刻限に遅れてここに帰って来るのだろう。それもよい。人の心とはそんなものだ。」「何を言う。」「深夜、セリヌンティウスは王城に呼ばれ、快く身代わりを引き受けた。メロスは縄を解かれ、出発した。」「初夏、満天の⑥であった。」「と作者は物語をここで折り返す。

結婚式を村人と祝い合い、メロスは三日目の夜明け、雨中、矢の如く走り出た。「私の価値は今から問われる。待つていてくれ。」「時間はたっぷりある、はずだった。ところが、どうだ。前日からの雨で河は荒れ狂い、船は流され橋は消えている。万事休す。メロスは、ゼウスに祈りを捧げ濁流に挑み、泳ぎ切る。そこに、今度は王の差し金か、一隊の山賊が襲いかかる。奪い取った棍棒で殴り倒す。だが、疲労は極限を超えた。倒れ伏した体に灼熱の太陽が焼け付く。身体が疲労すれば精神も共にやられる。」「セリヌンティウスよ、許してくれ。今も君は無心に私を待っているだろう。裏切るつもりは毛頭なかった。許してくれ・・・もういい。」意識が遠のいてゆく。

ふと、耳に水の音が聞こえる。飛び起きた。見よ、岩の割れ目から⑦清水が湧いているではないか。おお、これはゼウスの恵みか。一口飲んだ。ほうと長いため息が出て⑧から醒めた。歩ける。行こう。ああ陽が沈む。ずんずん沈む。「待つてくれ、ゼウスよ。私は生まれたときから正直な男であった。⑨な男のままに死なせてください。」「物語はクライマックスに向かい、文章は緊迫のリズムを強め、読者を圧倒し始める。

メロスは沈んでいく太陽の十倍も速く走った。道行く人を跳ね飛ばし、犬を蹴飛ばし、黒い雲のように走った。『間に合わぬか。いや、間に合う間に合わないはもう問題ではないのだ。』呼吸ができず、二度三度、口から血が噴き出した。ほとんど裸になっている。着いた。まさに最後の一片の残光も消えようとしている。セリヌンティウスが磔柱に吊り上げられていく。「待て、その人を殺してはならぬ。メロスが帰って来たぞ。殺されるのは私だ。」だが、声が、出ない。メロスは磔柱に吊り上げられていく友の両足にかじりついた。「おおお。」群衆は、どよめいた。「あつぱれ。許せ。許してやれ。王よ。」と口々にわめいた。暴君ディオニスは二人をじっと眺めていたが、やがて静かに口を開いた。「おまえらは・・・わしに勝った。」どつと群衆の間に、歓声が起こった。「万歳。王様万歳。」ひとりの少女が、緋のマントをメロスに捧げた。メロスはまごついた。よき友が言う。「メロスよ。君は真っ裸じゃないか。この可愛い娘さんは君の裸をほかの皆には見せたくないんだよ。」

勇者は、ひどく赤面した。

このように、作者は主題を「⑩」の一語に結晶させ、「赤面」で読者に余韻を残して小説を終える。中学生の時に出会ったメロスは私の胸に今も住み、やがて私の行動を映す鏡になった。「お前はそれでいいのか」と時々叱つてもくれる。こうして、メロスは生涯の友となり、私は彼の住む五〇〇〇年前の紺碧^{こんぺき}のエーゲ海を懐かしむのである。

(引用した原文は、読みやすくするため一部書き替えたところがあります。)

問1 ① この小説の作者を次の中から選んでください。

- 【ア 太宰治 イ 夏目漱石 ウ 森鷗外】

② この小説の作者の作品に「富嶽百景」があります。その中の「富士には、がよく似合う。」という一文は有名になり、作品の舞台である御坂峠に文学碑として残されていますが、作者はこの一文の前に、それは「三七七八メートルの富士の山と、立派に相對峙し、みじんも揺るがず、(略)けなげにすつくと立っていた」と言葉を置いています。

の中に入る語句を選んでください。

- 【ア 河口湖 イ 月見草 ウ アルプス連峰】

③ あなたが②でその語句を選んだ根拠となる文を、傍線部の作者の言葉の中から書き出してください。

問2 文中 の中に入ると思われる語句を選んでください。

- 【ア 星 イ 夢 ウ 友 エ 勇者 オ こんこんと カ 神話 キ 帰って
ク 正直 ケ 油断】

問3 『間に合わぬか。いや、間に合う間に合わないはもう問題ではないのだ。』とメロスは心中叫びますが、では何が問題だとそのときメロスは考えていたのでしょうか。あなたの言葉で書いてください。

問4 全文を読んだあなたの自由な感想を聞きます。何を、あるいは誰を視点にしても結構です。百字以内で文章としてまとめてください。

問題二 次の短歌の風景を楽しく想像し、あなたの言葉で描いてみてください。

マガジンをまるめて歩いて歩きたい日だけ ときおりポンと股で鳴らして (加藤治郎)

問題三 俳句を作ってみましょう。

俳句は「五・七・五」の十七音で作ることが約束です。さらに、季節を表す「季語」を詠み込むことも約束です。その上で、「や・かな」などの「切れ字」を使い、俳句を途中や句末で「切る」ことによって、描写の余韻や詠嘆などを深める効果的な技法もあります。

菜の花や月は東に日は西に (与謝蕪村) 季語は「菜の花」季節は「春」

がよい例です。この「や」で一瞬俳句が切れた空間に、私たちは一面に咲き渡る菜の花畠の広さを見、暮色に浮かぶ花の陰影の深さを味わうのです。一字が抜群の効果を見せています。では、切れ字「や」を使って、一句作ってみましょう。季語は「春風」とします。季節は春。「春風」は「はるかぜ」と詠んでも「しゅんふう」と詠んでもよいでしょう。蕪村の句を参考にしてもかまいません。

問題四 次の熟語の読みを書いてください。

- ① 市井 ② 措置 ③ 尊厳 ④ 古刹 ⑤ 畏怖 ⑥ 口唇